

注意を参考にして進退を考えていたが、思い切つて課長室へ入つて行つた。そこで意外なことを課長から聞かされた。それは堂島が昨夜のうちに速達で退社届を送つて寄こしたということであつた。卓上にまだあるその届書も見せて呉れた。

「そんな男とは思わなかつたがなあ。実に卑劣極まるねえ。社の方もボーナスを貰つてやめたのだしねえ。それに住所目下移転中と書いてあるだろう。何から何までずらからうという態度だねえ。君も撲られつ放しでは気が済まないだろうから、一つ懲こらしめのため

に訴えてやるか。誰かに聞けば直ぐ移転先きは分るだろう」
課長も驚いて膝を乗り出した。そしてもう既に地腫も引いて白磁色に艶つやつや々とした加奈江の左の頬をじつとみて

「痕は残っておらんけれど」と言った。

加奈江は「一応考えてみましてから」と一旦、整理室へ引退つた。待ち受けていた明子と磯子に堂島の社を辞めたことを話すと

「いまましいねえ、どうしましょう」

磯子は床を蹴つて男のように拳で傍の卓の上を叩いた。

「ふーん、計画的だったんだね。何か私たちが社に対して変な恨みでも持っていて、それをあんたに向つて晴らしたのかも知れませんがせんねえ」

明子も顰めた顔を加奈江の方に突き出して意見を述べた。

二人の憤慨とは反対に加奈江はへたへたと自分の椅子に腰かけて息をついた。今となつては容易く仕返しの出来難い口惜しさが、

固い鉄の棒のようになって胸に突つ張つた苦しきだった。

加奈江は昼飯の時間が来ても、明子に注いで貰つたお茶を飲んだだけで、持参した弁当も食べなかつた。

「どうするつもり」と明子が心配して訊ねると

「堂島のいた机の辺りの人に様子を訊いて来る」と言つて加奈江はしおしおと立つて行つた。

拓殖会社の大事務室には卓が一見縦横乱雑に並び、帳面立ての上にもまで帰航した各船舶から寄せられた多数の複雑な報告書が堆く載っている。四隅に置いたストーヴの暖かさで三十数名の男の社員達は一様に上衣うわぎを脱いで、シャツの袖口をまくり上げ、年内

の書類及び帳簿調べに忙がしかつた。加奈江はその卓の間をすり抜けて堂島が嘗^かつて向つていた卓の前へ行つた。その卓の右隣りが山岸という堂島とよく連れ立つて歸つて行く青年だつた。

加奈江は早速、彼に訊いてみた。

「堂島さんが社を辞めたつてね」

「ああそうか、道理で今日来なかつたんだな。前々から辞める辞めると言つてたよ。どこか品川の方にいい電気会社の口があるつてね」

すると他の社員が聞きつけて口をはさんだ。

「ええ、本当かい。うまいことをしたなあ。あいつは頭がよくつて、何でもはつきり割り切ろうとしていたからなあ」

「そうだ、ここのように純粹の軍需品会社でもなく、平和になればまた早速に不況になる懼れおそのあるような会社は見込みがないって言ってたよ」

山岸は辺りへ聞えよがしに言った。彼も不満を持つてるらしかった。

「あの人は今度、どこへ引つ越したの」

加奈江はそれとなく堂島の住所を訊き出しにかかった。だが山岸は一寸解げせないという顔付をして加奈江の顔を眺めたが、直ぐにやにや笑い出して

「おや、堂島の住所が知りたいのかい。こりや一杯、おごりものだぞ」

「いえ、そんなことじゃないのよ。あんたあの人と親友じゃないの」

加奈江は二人の間柄を先^まず知りたかった。

「親友じゃないが、銀座へ一緒に飲みに行つてね、夜遅くまで騒いで歩いたことは以前あつたよ」

「それなら新しい移転先き知つてるでしょう」

「移転先つて。いよいよあやしいな、一体どうしたつて言うんだい」

加奈江は昨日の被害を打ち明けなくては、自分の意図が素直に分つて貰えないのを知つた。

「山岸さんは堂島さんがこの社を辞めた後もあの人と親しくする

つもり。それを聞いた上でないと言えないのよ」

「いやに念を押すね。ただ飲んで廻ったというだけの間柄さ。社を辞めたら一緒に出かけることも出来ないじゃないか。もつとも銀座で逢えば口ぐらいは利くだろうがね」

「それじゃ話すけれど、実は昨日私たちの帰りに堂島が廊下に待ち受けていて私の顔を撲ったのよ。私、眼が眩くらむほど撲られたんです」

加奈江はもう堂島さんと言わなかった。そして自分の右手で顔を撲る身振りをしながら眼をつむったが、開いたときは両眼に涙を浮べていた。

「へえー、あいつがかい」

山岸もその周りの社員たちも椅子から立上つて加奈江を取巻いた。加奈江は更に、撲られる理由が単に口を利かなかつたということだけだと説明したとき、不断おとなしい彼女を信じて社員たちはいきり出した。

「この社をやめて他の会社の社員になりながら、行きがけの駄賃に女を撲って行くなんてわが社の威信を踏み付けにした遣り方だねえ。山岸君の前だけれど、このままじゃ済まされないなあ」

これは社員一同の声であつた。山岸はあわてて

「冗談言うな。俺だって承知しないよ。あいつはよく銀座へ出るから、見つけたら俺が代つて撲り倒してやる」

と拳をみんなの眼の前で振つてみせた。しかし社員たちはそれ

を遮さへぎった。

「そんなことはまだるいや。堂島の家へ押しかけてやろうじやないか」

「だから私、あの人の移転先が知りたいのよ。課長さんが見せて呉れた退社届に目下移転中としてあるからね」

と加奈江は山岸に相談しかけた。

「そうか。品川の方の社へ変ると同時に、あの方面へ引越すとは言ってたんだがね、場所は何も知らないんだよ。だが大丈夫、十時過ぎになれば何処の酒場でもカフェでもお客を追い出すだろう、その時分に銀座の……そうだ西側の裏通りを二、三日探して歩けば屹度きつとあいつは掴まえられるよ」

山岸の保証するような口振りに加奈江は

「そうお、では私、ちよいちよい銀座へ行つてみますわ。あんた
告げ口なんかしては駄目よ」

「おい、そんなに僕を侮辱ぶじよくしないで呉れよ。君がその気ならはまか
りながら一臂いっぴの力を貸す決心でいるんだからね」

山岸の提言に他の社員たちも、佐藤加奈江を仇討あだうちに出る壮美
な女剣客のようにはやし立てた。

「うん俺達も、銀ブラするときには気を付けよう。佐藤さんしつかり
りやれえ」

師走しわすの風が銀座通りを歩き交う人々の足もとから路面の薄うすぼこ

埃^りを吹き上げて来て、思わず、あつ！ と眼や鼻をおおわせる夜であつた。

加奈江は首にまいたスカーフを外套の中から掴み出して、絶えず眼鼻を塞^{ふさ}いで埃を防いだが、その隙に堂島とすれ違つてしまえば、それつきりだという懼^{おそ}れで直ぐにスカーフをはずして前後左右を急いで観察する。今夜も明子に来て貰つて銀座を新橋の方から表通りを歩いて裏通りへと廻つて行つた。

「十日も通うと少し飽き飽きして来るのねえ」

加奈江がつくづく感じたことを溜息と一緒に打ち明けたので、明子も自分からは差控えていたことを話した。

「私このごろ眼がまわるのよ。始終雑^{ざつ}沓^{とう}する人の顔を一々^{のぞ}覗い

て歩くでしよう。しまいには頭がぼーっとしてしまつて、家へ歸つて寝るとき天井が傾いて見えたりして吐氣はきけがするときもある」

「済みませんわね」

「いえ、そのうちに慣れると思つてる」

加奈江はまた暫しばらく黙つてすれ違ふ人を注意して歩いていたが「私、撲られた当座、随分口惜しかつたけれど、今では段々薄れて来て、毎夜のように無駄に身体を疲らして銀座を歩くことなんか何だか莫迦ぼからしくなつて来たの。殊に事変下でね……。それで往く人をして往かしめよつて気持ちで、すれ違ふ人を見ないようにするのよ。するとその人が堂島じゃなかつたかという気がかりになつて振り返らないではいられないのよ。何という因いんごう業ごうな事

でしょう」

「あら、あんたがそんなジレンマに陥っては駄目ね」

「でも頼一つ叩いたぐらい大したことでもないかも知れないし、こんなことの復讐なんか女にふさわしくないような気がして」

「まあ、それあんたの本心」

「いいえ、そうも考えたり、いろいろよ。社ではまだかまだかと訊くしね」

「それじゃ私が一番お莫迦さんになるわけじゃないの」

明子は顔をくしゃくしゃにして加奈江に言いかけたが、堂島に似た青年が一人明子の傍をすれ違ったので周章あわててその方に顔を振り向けると、青年は立止まって

「何ていう顔をするんですか」と冷笑したので明子はすっかり赤く照れて顔を伏せてしまった。青年はうるさくついて来た。加奈江と明子はもう堂島探しどころではなかった。二人はずんずん南へ歩いて銀座七丁目の横丁まで来た。その時駐車場の後端の方に在った一台のタクシーが動き出した。その中の乗客の横顔が二人の眼をひかないではいなかった。どうも堂島らしかった。二人は泳ぐように手を前へ出してその車の後を追ったが、バックグラスに透けて見えたのは僅かに乗客のソフト帽だけだった。

それから二人は再び堂島探しに望みをつないで暮れの銀座の夜を縫^ぬって歩いた。事変下の緊縮した歳暮はそれだけに成るべく無駄を省いて、より効果的にしようとする人々の切羽詰^{せっぱ}まったよう

な気分が街に籠こもって、銀ブラする人も、裏街を飲んで歩く青年たちにも、こつんとした感じが加わった。それらの人を分けて堂島を探す加奈江と明子は反撥はんぱつのようなものを心身に受けて余計に疲れを感じた。

「歳の瀬の忙しいとき夜ぐらいは家において手伝って呉れてもいいのに」

加奈江の母親も明子の母親も愚痴ぐちを滾こぼした。

加奈江も明子も、まだあの事件を母親に打ちあけてないことを今更、気づいた。しかしその復讐のために堂島を探して銀座に出るなどと話したら、直ただちに足止めを食うに決まっている——加奈江も明子も口に出さなかった。その代り「年内と言っても後四日、

その間だけ我慢して家にいましょう」二人は致し方のないことだと諦めて新年を迎える家の準備にいそしんだ。来るべき新年は堂島を見つけて出来るだけの仕返しをしてやる——そういう覚悟が別に加わって近ごろになく気持ちが張り続けていた

いよいよ正月になって加奈江は明子の来訪を待っていた。三日の晩になっても明子は来なかつた。加奈江は自分の事件だから本当は自分の方から誘いに出向くべきであつたと始めて気づいてひとりで苦笑した。今まで加奈江は明子と一緒に銀座の人ごみの中で堂島を掴まえるのには和服では足手まといだというので、いつも出勤時の灰色の洋服の上に紺の外套をお揃いで着て出たものだったが、^{さすが}流石に新年でもあり、まだ二三回しか訪れたことのない明

子の家へ行くのだから、加奈江は入念にお化粧して、女学校卒業以来二年間、余り手も通さなかつた裾模様の着物を着て金模様のある帯を胸高に締めた。着なれない和服の盛装と、一旦途切れて気がゆるんだ後の冒険の期待とに妙に興奮して息苦しかった。羅^ら紗^{しゃ}地のコートを着ると麻布の家を出た。外は一月にしては珍らしくほの暖かい晩であつた。

青山の明子の家に着くと、明子も急いで和服の盛装に着替えて銀座行きのバスに乗つた。

「わたし、正月早々からあんたを急^せぎ立てるのはどうかと思つて差控えてたのよ。それに松の内は銀座は早仕舞いで酒飲みなんかあまり出掛けないと思つたもんだから」

明子は言い訳をした。

「わたしもそうよ。正月早々からあんたをこんなことに引張り出すなんか、いけないと思つてたの。でもね、正月だし、たまにはそんな気持ちばかりでなく銀座を散歩したいと思つて、それで裾模様で来たわけさ。今日はゆつたりした気持ちで歩いて、スエヒロかオリンピックで厚いビフテキでも食べない」

加奈江は家を出たときは幾分心構えが變つていた。

「まあまあそれもいいねえ。裾模様にビフテキは少しあわないけれど」

「ほほほほ」

二人は晴やかに笑つた。

銀座通りは既に店を閉めているところもあつた。人通りも割合いに少なくて歩きよかつた。それに夜店が出ていないので、向う側の行人まで見通せた。加奈江たちは先ず尾張町から歩き出したが、またた瞬く間に銀座七丁目の橋のところまで来てしまった。拍子抜けのした気持ちだつた。

「どうしましょう。向う側へ渡つて京橋の方へ行つてオリンピックへ入りましょうか、それともこの西側の裏通りを、別に堂島なんか探すわけじゃないけれど、さっさと歩いてスエヒロの方へ行きますか」

加奈江は明子と相談した。

「そうね、何だか癖がついて西側の裏通りを歩いた方が、自然の
ような気がするんじゃない」

明子が言い終らぬうちに、二人はもう西側に折れて進んでいた。
「そら、あそこよ。暮に堂島らしい男がタクシーに乗ったところ
は」

明子が思い出して指さした。二人は今までの澄ました顔を忽ち^{たちま}
に厳くした。それから縦の裏通りを尾張町の方に向って引返し始
めたが、いつの間にか二人の眼は油断なく左右に注がれ、足の踏
まえ方にも力が入っていた。

資生堂の横丁と交叉する辻角に来たとき五人の酔った一群が肩
を一系列に組んで近くのカフェから出て来た。そしてぐるりと半回

転するようにして加奈江たちの前をゆれて肩をこすり合いながら歩いて行く。

「ちよいと！ 堂島じゃない、あの右から二番目」

明子がかすれた声で加奈江の腕をつかんで注意したとき、加奈江は既に獲物に迫る意気込みで、明子をそのまま引きずって、男たちの後を追いかけた。———どうかこの一列の肩がほぐれて、堂島一人になればよいが———と加奈江はあせりにあせった。それに堂島が自分達を見つけて知っているかどうかも知りたかった。そう思つて堂島の後姿を見ると特に目立って額を俯向うつむけているのも怪しかった。二人は半丁もじりじりして後をつけた。そのとき不意に堂島は後を振り返った。

「堂島さん！ ちよつと話があります。待つて下さい」

加奈江はすかさず堂島の外套の背を握りしめて後へ引いた。明子もその上から更に外套を握つて足を踏張つた。堂島は周章あわてて顔を元に戻したが、女二人の渾身こんしんの力で喰い止められてそれのまま遁のがれることは出来なかつた。五人の一行は堂島を底にしてV字型に折れた。

「よー、こりや素敵、堂島君は大変な女殺しだね」

同僚らしいあとの四人は肩組ほじも解いてしまつて、呆あきれて物珍らしい顔つきで加奈江たちを取巻いた。

「いや、何でもないよ。一寸失敬する」

そういつて堂島は加奈江たちに外套の背を掴まれたまま、連れ

を離れて西の横丁へ曲つて行つた。小さな印刷所らしい構えの横の、人通りのないところまで来ると堂島は立止まつた。離して逃げられでもしたらと用心して確しつかり握りしめてついて来た加奈江は、必死に手に力をこめるほど往時むかしの恨みが衝つき上げて来て、今はすさまじい気持ちになつていた。

「なぜ、私を撲なぐつたんですか。一寸口を利かなかつたぐらいで撲る法がありますか。それも社を辞める時をよつて撲るなんて卑ひきよ怯うじゃありませんか」

加奈江は涙が流れて堂島の顔も見えないほどだった。張りつめていた復讐心が既に融け始めて、あれ以来の自分の惨めな毎日が涙の中に浮び上つた。

「本当よ、私たちそんな無法な目にあつて、そのまま泣き寝入りなんか出来ないわ。課長も訴えてやれつて言つてた。山岸さんなんかも許さないつて言つてた。さあ、どうするんです」

堂島は不思議と神妙に立っているきりだった。明子は加奈江の肩を頻りに^{しぎ}押し、叩き返せと急きたてた。しかし女学校在学中でも友達と口争いはしたけれども、手を出すようなことの一度だつてなかつた加奈江には、いよいよとなつて勢いよく手を上げて男の顔を撲るなぞということはなかなか出来ない^{しわざ}仕業だった。

「あんまりじゃありませんか、あんまりじゃありませんか」

そういう鬱憤の言葉を繰返し繰返し^つ募ることによつて、加奈江は激情を弾ませて行つて

「あなたが撲ったから、私も撲り返してあげる。そうしなければ私、気が済まないのよ」

加奈江は、やつと男の頬を叩いた。その叩いたことで男の顔がどんなにゆがんだか鼻血が出はしなかったかと早や心配になり出す彼女だった。叩いた自分の掌に男の脂汗が淡くくつついたのを敏感に感じながら、加奈江は一步後退^{しさ}った。

「もつと、うんと撲りなさいよ。利息つてもものがあるわけよ」
明子が傍から加奈江をけしかけたけれど、加奈江は二度と叩く勇気がなかった。

「おいおい、こんな隅っこへ連れ込んでるのか」
さっきの四人連れが後から様子を覗きにやって来た。加奈江は

独りでさっさと数寄屋橋の方へ駆けるように離れて行った。明子が後から追いついて

「もっとやつつけてやればよかったのに」

と、自分の毎日共に苦勞した分までも撲つて貰いたかった不満を交ぜて残念がった。

「でも、私、お釣銭は取らないつもりよ。後くされが残るといけないから。あれで私気が晴々した。今こそあなたの協力に本当に感謝しますわ」

改まった口調で加奈江が頭を下げてみせたので明子も段々気がほぐれて行って「お目出とう」と言った。その言葉で加奈江は「そうだった、ビフテキを食べるんだったつけね。祝盃を挙げま

しようよ。今日は私のおごりよ」

二人はスエヒロに向つた。

六日から社が始まつた。明子から磯子へ、磯子から男の社員達に、加奈江の復讐成就が言い伝えられると、社員たちはまだ正月の興奮の残りを沸き立たして、痛快々々と叫びながら整理室の方へ押し寄せて来た。

「おいおい、みんなどうしたんだい」

一足^{おく}後れて出勤した課長は、この光景に不機嫌な顔をして叱つたが、内情を聞くに及んで愉快そうに笑いながら、社員を押し分けて自分が加奈江の卓に近寄り「よく貫徹したね、
仇^{あだうちほんかい}討本懐

じや」と祝った。

加奈江は一同に盛んに賞讃されたけれど、堂島を叩き返したあの瞬間だけの強しいて自分を弾ませたときの晴々した気分はもうとつくに消え失せてしまつて、今では却つてみんなからやいやい言われるのがかえつて自分が女らしくない奴のしと罵られるように嫌だつた。

社ひが退けて家に帰ると、ぼんやりして夜を過ごした。銀座へ出かける目標めあても気乗りもなかつた。勿論もちろん、明子はもう誘いに来なかつた。戸外は相変らず不思議に暖かくて雪の代りに雨がしよぼしよぼと降り続いた。加奈江は茶の間の隅に坐つて前の坪庭の山さ茶花ざんかの樹に雨が降りそそぐのをすかし見ながら、むかしの仇討ち

をした人々の後半生というものはどんなものだろうなぞと考
えたりした。そして自分の詰らぬ仕返しなんかと較べたりする自分
をばか莫迦になったのじゃないかとさえ思うこともあった。

一月十日、加奈江宛の手紙が社へ来ていた。加奈江が出勤する
と給仕が持って来た。手紙の表には「ある男より」と書いてある
だけで加奈江が不審に思っ
て開いてみると意外にも堂島からであ
った。

この手紙は今までの事柄の返事のも
つもりで書きます。僕は自分
で言うのもおかしいけれど、は
つきりしていると思う。現在、

あの拓殖会社が煮え切らぬ存在で、
今度の社が軍需に専念であ

る点が僕の去就を決した。しかし私に割り切れないものがあの社を去るに当って一つあった。それは貴女に対する私の気持でした。社を辞めるとなれば殆どほとん貴女には逢えなくなる。その前に僕の気持を打ち明けて、どうか同情して貰いたいとあせった。しかし僕は令嬢というものに対してはどうしても感情的なことが言い出せない性質です。だから遂々とうとうボーナスを貰って社を辞めようとした最後の日まで来てしまったのです。いよいよ、言うことすら出来ないのか。思い切って打ち明けたところで、断られたらどういうことになる。此方こちらはすぐごと思いを残して引下り貴女は僕のことなぞ忘れてしまうだけだ。いつそ喧嘩けんかでもしたらどうか。或あるいは憎むことによつて僕を長く忘れない

かも知れない。僕もきつかり決裂した感じで気持をそらすことが出来よう。そんな自分勝手な考えしか切羽詰せっぱつて来ると浮びませんでした。とつおいつ、僕は遂に夢中になって貴女をあの日、撲ったのでした。しかし、女を、しかも一旦慕った麗人を乱暴にも撲ったということは僕のヒューマニズムが許しませんでした。いつも苦い悪汗となって胸に浸み渡るのです。その不快さに一刻も早く手紙を出して詫びようと思ったが、それも矢張り自分だけを救うエゴイズムになるのでやめてしまったのです。先日、銀座で貴女に撲り返されたとき、これで貴女の気が晴れるだろうから、そこでやっと自分の言い訳やら詫びをしようと、もじもじしていたのですが、連れの者が邪魔して、そ

れを果しませんでした。よつて手紙を以つて、今、釈明する次第です。平にお許し下さい。

堂島潔

としてあつた。加奈江は、そんなにも迫つた男の感情つてあるものかしらん、今にも堂島の荒々しい熱情が自分の身体に襲いかかつて来るような気がした。

加奈江は時を二回分けて、彼の手、自分の手で夢中になつてお互いを叩きあつた堂島と、このまま別れてしまふのは少し無慙むざんな思ひがあつた。一度、会つて打ち解けられたら……。

加奈江は堂島の手紙を明子たちに見せなかつた。家に帰るとその晩一人銀座へ向つた。次の晩も、その次の晩も、十時過ぎまで

銀座の表通りから裏街へ二回も廻つて歩いた。しかし堂島は遂に姿を見せないで、路上には漸くようや一月の本性の寒風が吹き募つて来た。

青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1993（平成5）年8月24日第1刷発行

底本の親本：「老妓抄」中央公論社

1939（昭和14）年3月18日発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2010年2月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

越年

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>